国際バカロレア中等教育プログラムにおける評価観―形成的評価に注目して―

氏名　　有馬　実世

本論文は、国際バカロレア中等教育プログラムが示す評価観を明らかにすることを目的とした。

これまでの日本の教育評価研究においては、様々な評価の方法の意義や課題は明らかにされているものの、教師の指導や学習者の経験は問われてこなかった。

そこで本論文では、学習者の学習と評価との関係についての問題意識をプログラムの開発の出発点としており、現代の日本の教育現場及び教育行政においても、その評価のあり方が注目されている国際バカロレア中等教育プログラムに焦点を当て、プログラムにおける評価観を一体的に捉えることを目的とした。

近年、目指されている形成的評価の実践には教師の評価観の問い直しが求められることから、本論文では、国際バカロレア中等教育プログラムの評価観を検討するにあたり、形成的評価を分析の枠組みとして設定した。欧米の形成的評価の再構築の過程に従い、学習者の視点から形成的評価の実態を捉えることを本研究では試みている。

第 1 章では、国際バカロレアと中等教育プログラムの成立にあたり、評価のあり方に起因する教師の指導や生徒の学習への問題意識があったことを明らかにした。

第 2 章では、国際バカロレアの評価のあり方に込められた意図を検討するため、国際バカロレアのカリキュラム構想に多大な影響を与えたとされるピーターソンの評価観を明らかにした。彼は、評価をも教育の目標を具体化するための一つの方法として位置づけていた。彼が考える教育の目標から導き出される評価観は、「自己認識の機会」としての評価であった。この傾向は現代の国際バカロレアの評価観にも踏襲されている。国際バカロレアはすべてのプログラムで、学校の教師による形成的評価、中でも評価における学習者の役割に注目する「学習としての評価」を重視していた。

第 3 章では、第 2 章で明らかになった国際バカロレアの評価に込められた意図に沿って、中等教育プログラムに取り組む教師が実施することが可能かどうかを検討した。中等教育プログラムは、自己評価を重視する教育評価理論を採用している。各国の形成的評価について調査・研究を行った OECD の枠組みを用いて検証したところ、中等教育プログラムに関する文書が、教師を形成的評価の実践に導くことが可能であると判断した。

第 4 章では、国際バカロレア中等教育プログラムに取り組む教師やそこで学ぶ生徒が置かれた文脈を理解することを目的とし、日本における国際バカロレア教育について概観した。

第 5 章では、中等教育プログラムの評価に取り組む教師が置かれている状況を理解し、日本独自の評価の文脈を整理することを目的とした。そこで、形成的評価概念は、日本においては教育評価の研究者が用いた言葉が継承されており、形成的評価が教師による「見取り」、「見極め」と捉えられ続けている現状を見出した。

こうした状況で、日本の一条校で国際バカロレア中等教育プログラムに取り組む教師は、形成的評価をいかに理解し、実践に生かすのだろうか、との問いに答えるため、本論文では、インタビューを行ってデータを収集する質的研究方法を採用した。第 6 章では、国際バカロレア中等教育プログラムに取り組む教師の評価観の変容のプロセスを検討した。認定校や候補校で教える教師 10 名を対象として得られたインタビューデータの分析の結果、教師の評価観は、成績や評定としての評価から、生徒の学習状

況を意味づけ、判断する評価、すなわち教師による「見取り」、「見極め」から、「自己認識の機会」としての評価へと変容することが明らかになった。学校ごとの分析からは、形成的評価を重視する評価においては、一人の教師による教室での「見取り」、「見極め」から教師の間での評価をめぐる「実践共同体」の構築が求められることを明らかにした。

第 7 章では、国際バカロレア中等教育プログラムで学ぶ生徒の評価観の変容のプロセスを検討した。中等教育プログラム認定校で学ぶ生徒 29 名を対象として得られたインタビューデータを分析し、生徒の評価観の変容のプロセスを表した。結果、生徒は、中等教育プログラムの評価規準を使用し、自己評価やピア評価、教師からのフィードバックを受ける機会を経た総括的評価の経験を繰り返し、「自分で自分を評価する」との評価観に至ることが明らかになった。しかし自己評価を促す評価観に基づく実践と、「見取り」、「見極め」との評価観に基づく実践においては、生徒の評価観が異なることが明らかになった。

以上の検討から、新しい評価においては、教師の指導改善から学習者の学習改善へ、「見取り」、「見極め」から教師と生徒の評価の実践共同体づくりへ、という評価観への転換が求められるとの実践上の示唆を得た。